

共同研究の経過と概要

1. 目的

国立歴史民俗博物館は昭和56年度から基幹的な共同研究『日本における基層信仰の研究』のもと、さまざまな課題を設定して研究を推進してきた。今回の「死者儀礼と死の観念」を研究課題とする第Ⅲ期研究は、第Ⅱ期研究の研究課題であった「葬墓制と他界観」と「家族親族と先祖祭祀」を継承して実施したものである。平成2年度から平成4年度までの3年計画で開始したこの第Ⅲ期研究は、各時代・各地域において死後の比較的短期間に行われた葬送と埋葬に関わる儀礼を検討の対象として、日本における死の文化的・社会的特性を理解しようとするものであった。具体的には、今日の問題でもある死の認定時期・葬送集団・土葬と火葬・骨肉の意義・靈魂の行方・邪避と再生など死者儀礼に関わる多種の問題点を、東アジアの歴史的展開を踏まえながら、多様な視点から検討することであった。そのために歴史学・考古学・民俗学・文化人類学など各分野からの参画を願った共同研究員各氏は次の方々である。(敬称略。職名は共同研究実施期間当初のもの)

吉村武彦	明治大学文学部 教授
平川 南	国立歴史民俗博物館歴史研究部 教授
細川涼一	京都橘女子大学文学部 助教授
吉井敏幸	元興寺文化財研究所 主任研究員
水藤 真	国立歴史民俗博物館歴史研究部 助教授
北原糸子	東洋大学社会学部 非常勤講師
林 謙作	北海道大学文学部 助教授 (国立歴史民俗博物館客員教官)
甲元眞之	熊本大学文学部 助教授 (国立歴史民俗博物館客員教官)
西谷 大	国立歴史民俗博物館考古研究部 助手
春成秀樹	国立歴史民俗博物館考古研究部 教授
設楽博己	国立歴史民俗博物館考古研究部 助手
藤尾慎一郎	国立歴史民俗博物館考古研究部 助手
杉山晋作	国立歴史民俗博物館考古研究部 助教授
五十川伸矢	京都大学文学部 助手

田中久夫 神戸女子大学文学部 教授
植松明石 跡見学園女子大学文学部 教授
上野和男 国立歴史民俗博物館民俗研究部 助教授
小松和彦 大阪大学文学部 助教授
佐野賢治 筑波大学歴史・人類学系 助教授
小野澤正喜 筑波大学歴史・人類学系 助教授
川森博司 国立歴史民俗博物館民俗研究部 助手

2. 経過

平成2年度は、縄文・弥生・古墳時代の埋葬とそれに関わる儀礼の報告検討が中心となったが、再葬や死者の遺棄についての認識の相異も論議の焦点となった。平成3年度は、中世都市・京都や大和および近世都市・江戸を中心として葬地・墓地と葬送集団・葬儀屋の実態が紹介され、古代中国の動物随葬や現代台湾での死者儀礼も報告検討された。平成4年度は、古代日本における墓地での集団祭祀の成立や死の儀礼、そして地方である中世・和泉や近世・九州における葬送集団や墓地形成と親族組織が、近現代に関しては死霊をめぐる死の観念が報告検討されたほか、中国大陸・朝鮮半島・東南アジアにおける死の世界観も紹介されて比較検討が行われた。臨時講師によるものも含めた研究発表は次のとおりである。

[平成2年度]

第1回研究会（平成2年9月29日，於 国立歴史民俗博物館）

「第I期・第II期研究の成果と課題および第III期の研究計画について」

「古墳への死者送り——地域的事例と派生する問題——」

杉山晋作（国立歴史民俗博物館）

第2回研究会（平成2年12月22日，於 国立歴史民俗博物館）

「死の前後」 井阪康二（西宮市立郷土資料館）

「死体の遺棄」 田中久夫（神戸女子大学）

第3回研究会（平成3年2月15日，於 国立歴史民俗博物館）

「再葬の儀礼——弥生時代——」 設楽博己（国立歴史民俗博物館）

「縄文・弥生時代の埋葬頭位」 林 謙作（北海道大学）

[平成3年度]

第4回研究会（平成3年7月12日，於 国立歴史民俗博物館）

{江戸の墓制——中小寺院の発掘事例を中心に——}

- 「新宿区・発昌寺跡の調査成果」 榎木 真（新宿歴史博物館）
- 「江戸の寺院・葬祭に関する史的研究の現状と新視角」 北原糸子（東洋大学）
- 「江戸の墓制」 谷川章雄（早稲田大学）
- 第5回研究会（平成3年9月27日，於 国立歴史民俗博物館）
- 「中世の葬制・墓制」 水藤 真（国立歴史民俗博物館）
- 「死者儀礼について——台湾漢族・沖縄の場合——」 植松明石（跡見学園女子大学）
- 「江戸被葬者のひとつの例」 塚本 学（国立歴史民俗博物館）
- 第6回研究会（平成3年12月13日，於 国立歴史民俗博物館）
- 「中国の動物随葬墓」 甲元眞之（熊本大学）
- 「三昧聖と墓制の変遷」 吉井敏幸（元興寺文化財研究所）
- 第7回研究会（平成4年2月27日，於 国立歴史民俗博物館）
- 「関東における古代・中世墓地の一調査」 宮内勝巳（東総文化財センター）
- 「中世京都の墓」 五十川伸矢（京都大学）
- [平成4年度]
- 第8回研究会（平成4年8月28・29日，於 国立歴史民俗博物館）
- 「忌服の範囲と親族組織」 上野和男（国立歴史民俗博物館）
- 「中世和泉国の葬制と三昧聖」 細川涼一（京都橘女子大学）
- 「近世の葬儀に関する若干の史料」 山本光正（国立歴史民俗博物館）
- 「比較の視点としての『風水』」 川森博司（国立歴史民俗博物館）
- 第9回研究会（平成4年11月7日，於 国立歴史民俗博物館）
- 「鹿児島県・龍徳院墓地の調査」 春成秀樹（国立歴史民俗博物館）
- 藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館）
- 「龍徳院春成家墓地の構造」 上野和男（国立歴史民俗博物館）
- 「東南アジアにおける死者儀礼と死の観念」 小野澤正喜（筑波大学）
- 第10回研究会（平成4年12月11・12日，於 国立歴史民俗博物館）
- 「山中他界観とモリ山信仰」 佐野賢治（筑波大学）
- 「死をめぐる想像力」 小松和彦（大阪大学）
- 「水稻農耕開始期の死者儀礼と死の観念」 藤尾慎一郎（国立歴史民俗博物館）
- 第11回研究会（平成5年2月10・11日，於 国立歴史民俗博物館）
- 「古代中国における死の観念の変化」 西谷 大（国立歴史民俗博物館）
- 「古代における死」 吉村武彦（明治大学）
- 「合同検討会」

3. 発表の概要

東アジアでも死によって肉体と靈魂が分離すると考えられてきた、とする見解は異論のない出発点であった。しかし、死と認定する時期そして分離した肉体と靈魂の行方については、関連して行われた儀礼が多様であったことから、検討の場でのその問題をめぐる解釈は分れるものとなった。

死の発生後に最初に行なわれる葬送儀礼である「もがり」的行為は、生と死の未確定時期を含み死者の蘇生と死靈の安寧という異なる二つを願うものであった、とする見解に対して、確定した死後の魂が及ぼす害を避けようとするものであった、あるいは、死靈を追放し死後の世界での再生が願われた、とする見解も出ている。また、死は体験できないが故にイメージをもって具象化され、葬送儀礼においては生の世界の儀礼とは逆位置となる儀礼が行なわれた事例も紹介された。

葬送集団に関しては、多種の職能者に分化している台湾漢族の実態や、日本の中近世で特定宗派に属さなかった三昧聖の実態が報告され、その後の近世都市に出現する葬儀屋との関連性も検討された。一方、近世農村における葬送の共同作業について検討されたほか、墓地における集団祭祀は古く弥生時代の水稲農耕開始期に遡って見られるという問題提起もなされた。

とくに土葬や火葬など遺骸の処置については、火葬が古くは縄文時代に遡って見られ、古代以降中世近世を通じて都市や農村に偏在することなく選択して採用されたこと、その選択は単純に死者の社会的身分秩序のみによってなされたのではなく、経済的その他の事情にもよったことが明らかとなった。

一方、骨肉とくに骨に対する特別な意識を持っていたか否かについての解釈はさまざまである。古代に限らず他の時代にも、また、日本に限らず他の地域でも広く行なわれたところの骨を集めて改めて納め直す風習は、骨に靈が宿るとするような特別な意識があったと考えないことには成立し得ないであろうとする見解に対して、両墓制における埋墓の放置などのように古くから指摘されている事象では祭祀が継続していないから遺骸は遺棄されたと理解すべきであるとする見解が出されている。中世近世に行き倒れなどの死者を一括して放棄したかの如き事例が確かに存在したことも紹介された。

これに対する靈魂の行方に関する観念も重要な課題であった。やがては祖靈化に向かう通常の靈魂の行方の検討にとどまらず、とくに、子供・未婚者などの死を異常死とする台湾・沖縄の事例を始めとして、異常死に伴う靈についてはこれを畏怖し鎮めようとした多くの儀礼とその靈の行方に関する観念が検討された。死後の世界観の成立は中国では殉葬者などが存在する古代国家形成期から見られると報告された。死後の靈の行方は、徐々に高所に向かいやがて祖靈化するという日本の事例と似るかのよう、古代中国でも西方の山に靈が辿り着くという死後の世界観が

ある一方で、東南アジアでは世界的宗教と土着的信仰による他界観念の複層的な存在から、祖霊と悪霊に半可逆性・不可逆性の二つを認める複雑な事例があることも紹介されている。また、死者に随葬されるものをめぐっては、死者に邪悪がとりつくことを防ぐ意図と死霊の再生を願う意図の二種が存在したと考えられる事例が報告されていて、死後の世界のために供用される供献品が二種の意図のどちらに通じるのか今後に残された課題もある。

家族親族構成のうち忌服の範囲は、その社会が父系重視の単系かそれとも双系であったのかということによっても相異しているとする指摘を始めとして、東アジアの死者儀礼に関わる諸問題は歴史的背景と変遷を絡ませて考察しなければならない点が多い。

4. 報告に際して

対象をより限定した課題であったにもかかわらず、各時代・各地域すべてにわたって検討できず、日本における死者儀礼の特性を抽出したとは言い難い。

考古学では墓地からの復元に頼らざるを得ず、歴史学では史料が豊富でない時代もあり、民俗学・人類学では時代を遡った事象への解釈が躊躇されるなどの各分野における限界があって、これを補完しあって死者儀礼の深い論議を進める方法を創出するのはなかなか困難である。しかし、この共同研究によって各々の学問分野における用語の概念を共通理解するなど今後に向けての出発点には立ったと思われる。

ここに共同研究の経過を記して本論に移るが、研究発表とはテーマの異なる論が掲載されているものがある。共同研究の場における発表と討論を踏まえて、新たに問題を提起されたものと理解いただきたい。なお、ここに掲載できなかった共同研究員諸氏の論は後日の別集に発表される。

(杉山晋作 国立歴史民俗博物館考古研究部・研究代表者)